

令和

出典は万葉集卷五、梅花歌卅二首并序

「天平二年正月十三日 萃于帥老之宅 申宴會也 于時初春令月 氣淑風和 梅披鏡前之粉 蘭薰珮後之香 加以曙嶺移雲 松掛羅而傾蓋 夕岫結霧 鳥封穀而迷林 庭舞新蝶 空歸故鴈 於是蓋天坐地 <促>膝飛觴 忘言一室之裏 開衿煙霞之外 淡然自放 快然自足 若非翰苑何以攄情 詩紀落梅之篇 古今何異哉 故而賦之于園梅 聊成短詠也」とされる。

梅花（うめのはな）の歌三十二首并せて序

「天平二年正月十三日に、師（そち）の老（おきな）の宅（いへ）に萃（あつ）まりて、宴會を申（ひ）らく。時に、初春（しよしゆん）の令月（れいげつ）にして、氣淑（よ）く風和（やはら）ぎ、梅は鏡前（きやうぜん）の粉（こ）を披（ひら）き、蘭（らん）は珮後（はいご）の香（かう）を薰（か）をらす。加之（しかのみにあらず）、曙（あけぼの）の嶺に雲移り、松は羅（うすもの）を掛けて蓋（きにがさ）を傾け、夕の岫（くき）に霧結び、鳥はうすものに封（こ）めらえて林に迷（まと）ふ。庭には新蝶（しんてふ）舞ひ、空には故雁（こがん）帰る。ここに天を蓋（きにがさ）とし、地を座（しきみ）とし、膝を促（ちかづ）け觴（かづき）を飛ばす。言（こと）を一室の裏（うら）に忘れ、衿（えり）を煙霞の外に開く。淡然（たんぜん）と自（みづか）ら放（ひしきまま）にし、快然と自（みづか）ら足る。若し翰苑（かんゑん）にあらずは、何を以（も）ちてか情（こころ）を攄（の）べむ。詩に落梅の篇を紀（しる）す。古（いにしへ）と今（いま）とそれ何そ異（こと）ならむ。宜（よろ）しく園の梅を賦（ふ）して聊（いささ）かに短詠を成すべし」。

天平二年（730年）の正月十三日に大宰師の大伴旅人の邸宅にて、梅花の宴で詠んだ歌三十二首の序文。

「時に、初春の好き月にして、空気はよく風は爽やかに、梅は鏡の前の美女が装う白粉のように開き、蘭は身を飾った香のように薫っている。のみにあらず、明け方の嶺には雲が移り動き、松は薄絹のような雲を掛けてきぬがさを傾け、山のくぼみには霧がわだかまり、鳥は薄霧に封じ込められて林に迷っている。庭には蝶が舞ひ、空には年を越した雁が帰ろうと飛んでいる。ここに天をきぬがさとし、地を座として、膝を近づけ酒を交わす。人々は言葉を一室の裏に忘れ、胸襟を煙霞の外に開きあっている。淡然と自らの心のままに振る舞い、快くそれぞれが満ち足りている。これを文筆にするのでなければ、どのようにして心を表現しよう。中国にも多くの落梅の詩がある。いにしへと現在と何の違いがあろう。よろしく園の梅を詠んでいささの短詠を作ろうではないか。」という現代語訳が付されている。

令月の由来は、土冠禮の「始加祝曰、令月令吉日始加元服 令、吉、皆善也。元、首也」

「始加に祝して曰く、令月令吉日始めて元服を加う。令、吉は、皆善なり。元は首なり」にある。中国では成人男子は冠を付けるべしとされた。冠の形状や色によって身分が識別され、無冠とは士大夫以下の民とされ、士大夫でありながら冠を付けない者は結婚の対象から外された。冠や頭巾を付けない者は、頭の黒い民、黎民とされ、統治される側の民とみなされた。

始加とは初めて冠を加えることであり、善き月の善き日、吉月吉日にその儀式を行った。初春の

令月、善き月ということで正月を指している。気淑とは、新春（新年）の瑞祥（ずいしやう）の気が四辺に満ちていること。風和とは厳しい寒風の中にも春のやわらぎのあること。

令の語源は、説文解字によれば、「號を發すなり。亼（しふ；集）と卩（せつ；節）に从（したがう）」とあり、人を集めて五瑞の節を頒（わか）ち、その政令を發する意とする。

 ト文や金文、甲骨文字では礼帽を着けて、謹み跪（ひざまず）いて神意を聴く人の形、これに卩（ト文を入れた器）を加えたものが命（みこと）であり、神意とは神の命ずるところとする。金を加えたものが鈴、神を降ろし、送る楽器、神意に従うことを令善とする（字統）。
和の語源は、説文解字によれば、「相應（こた）ふるなり。口に従う。禾聲」とあり、応和、相和す意とする。

（和）は（禾）と（口）からなり、禾はこの場合穀物ではなく、軍門に立てる標識で、軍門で盟誓し、和議を行うこと（字統）とされる。口は盟を誓った文を納めた器、これを禾に吊るして和議を約したのであろう。

安倍首相は、新元号に込めた願いを「悠久の歴史と薫り高き文化、四季折々の美しい自然。こうした日本の国柄を、しっかりと次の時代へと引き継いでいく。厳しい寒さの後に春の訪れを告げ、見事に咲き誇る梅の花のように、一人ひとりの日本人が、明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることができる。そうした日本でありたいとの願いを込め、『令和』に決定した」としておられる。

令和は令月の令と風和の和から成り立っているが、時と共に、令和のみで解釈がされるようになる。令を名詞、形容詞、動詞、いずれとみるかで解釈が異なる。

"rei," which can mean auspicious (吉兆) in traditional texts, and "wa" meaning peace (米紙ウォールストリートジャーナル) は名詞の場合。auspicious は Conducive to success; favourable/ *archaic* Characterized by success; prosperous. とあり、成功・繁栄をもたらす、好ましい、縁起が良いものである。"order and harmony (英 BBC) "も名詞。

形容詞なら、auspicious/ favourable/ gracious/ good/ beautiful peace/harmony となろうか。動詞なら、Order peace/ harmony などと変化してゆくことが想定されよう。

令和は、相和せよとの神意を謹みて聴くことである。ラグビーのワールドカップを見据えて、"rei,wa" とは、“Listen to and be aware of the God’s will being as one for all, and all for one” とでも喧伝しておいては如何なものか。